武蔵野日曜聖書講筵

羔の婚姻

――黙示録第19章――

１９７２年６月18日
小池辰雄

羔は聖意体現者　聖徒たちの正しき行為　忠実また真　白く潔き細布　結婚路　十字架の贖いの愛　贖われて御霊を賜った者

【ヨハネ黙示録19】

1この後われ天に大いなる群衆の大声のごとき者ありて、斯く言うを聞けり。曰く『ハレルヤ、救いと栄光と権力とは、我らの神のものなり。2その御審は真にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給いしなり』

3また再び言う『ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり』4ここに二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐したもう神を拝し『アァメン、ハレルヤ』と言えり。5また御座より声出でて言う『すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大いなるも、我らの神を讃め奉れ』6われ大いなる群衆の声おおくの水の音のごとく、烈しき雷霆の声の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、7われら喜び楽しみて之に栄光を帰し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みずから準備したればなり。8彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』

9御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。また我に言う『これ神の真の言なり』10我その足下に平伏して拝せんとしたれば、彼われに言う『慎みて然すな、我は汝およびイエスの証を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんじ神を拝せよ、イエスの証は即ち預言の霊なり』

11我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたもう者は「忠実また真」と称えられ、義をもて審き、かつ戦いたもう。12彼の目は焔のごとく、その頭には多くの冠冕あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。13彼は血に染みたる衣を纏えり、その名は「神の言」と称う。14天に在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乗りて彼にしたがう。15彼の口より利き

剣いづ、之をもて諸国の民をうち、鉄の杖をもて之を治め給わん。また自ら全能の神の烈しき怒りの酒槽を践みたもう。16その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。

17我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。大声に呼ばわりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言う『いざ神の大いなる宴席に集いきたりて、18王たちの肉、将校の肉、強き者の肉、馬と之に乗る者との肉、すべての自主および奴隷、小なるもの大いなる者の肉を食え』

19我また獣と地の王たちと彼らの軍勢とが相集まりて、馬に乗りたもう者および其の軍勢に対いて戦闘を挑むを見たり。20かくて獣は捕えられ、又その前に不思議を行いて獣の徽章を受けたる者と、その像を拝する者とを惑わしたる偽預言者も、之とともに捕えられ、二つながら生きたるまま硫黄の燃ゆる火の池に投げ入れられたり。21その他の者は馬に乗りたもう者の口より出づる剣にて殺され、凡ての鳥その肉を食いて飽きたり。

●羔は聖意体現者

今日は黙示録19章です。最後の7月2日は午前が21章、午後が22章をいたしまして、黙示録を一応終わりたいと思います。とにかく、何をやっても必ず、他の人ができないことができるようになってきます。これは聖書の御霊・御言の真理を洞察する素晴らしさを自ら証明しますから。それは我々が今ねらっている、また捕まえられつつあるところの信仰でなければもちろんダメです、いわゆる主義主張といったような信仰では。

19章にいきましょう。今日は題して「羔の婚姻」という。「羔の婚姻」という題をだすと、すぐ思うのは藤井先生のこと。藤井先生が生命をかけて証したところの真理の一端を学びたいというわけです。

1この後われ天に大いなる群衆の大声のごとき者ありて、斯く言うを聞けり。曰く『ハレルヤ、救いと栄光と権力とは、我らの神のものなり。2その御審は真にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給いしなり』

非常に著しい言葉です。このハレルヤの後のところはちょっと詩のような調子をもって語られています。19章8節までに「ハレルヤ」という言葉が4回も出てくるので、これくらい畳みかけて「ハレルヤ」という言葉が出てくるのはおそらく他にないはずです。

「救いと栄光と権力とは神のものである」

という。現代くらい、キリスト教国といえども、神から遠ざかってしまった時はなかったのではないかと思うくらいです、この20世紀は。ことに若い方々の心の動きを見ていると、非常に無神的な方向に走っている。まさに傍若無人でもあるし、傍若無神でもあるような

傾向が非常に多い。

そういうなかで特に選ばれて、この福音の世界に入った君たちは、非常な責任と栄光を担っているわけです。決して自分の存在をいい加減に考えてはいかん。それは本当ですよ。もう本当に神の遺(のこ)れる民として――イザヤ書に

「**遺れる民**」

という言葉がありますが――まさに「遺れる民」としてこの20世紀の危機を突き抜けていただきたいと思うわけです。

どこまでも本当の平伏(ひれふ)しであります。私は学校ではっきりとそのことは、大学でも高等学校でも、申しております。「ドイツの宗教」の講義も、ここに二、三の証人もいらっしゃいますけれども、

「単なるドイツの宗教の歴史の話をしているのではない」

という角度から時々おおいにやっているわけです。

「**神の僕(しもべ)らの血の復讐を彼らになし給えり**」

と。「神の僕ら、婢女(はしため)ら」というものは、これはみな十字架を負う。「血」というのはまさにキリストの

「十字架の血」

に連なる血であります。もちろん、贖罪の意味を持ったわけではありませんけれども、福音に連なる人たちの生涯というものは、そういった十字架の血に連なるものである。正直、その涙もその血も全然、人に知られずして仆(たお)れていった人が幾人もある。また、キリスト教国でなくても、日本の封建時代には非常にそういったことがあったと思われます。正しいことのために、また本当の情けを反対に踏みにじられて逝った人たちはみな「神の民」であるので、

「キリストを知る、知らない」

とか、そういうことではない。広い意味において、本当に

「神の子ら」

の死というものは、全世界の各民族の中にそういった人たちがこの歴史を担ってきた。それが

「神の民」

であります。そういった

「**血の復讐**」

が必ずなされる。

「ズィットリッヒェ　ヴェルトオルドゥング」(Sittliche Wertordung 倫理的世界秩序)

というけれども、正に

「ガイストリッヒェ　ヴェルトオルドゥング」(Geistliche Weltordung 霊的世界秩序)

です。

「霊的なまた道徳な世界秩序」というものは、どんなに踏みにじられているよう見えても、決してそれは踏みにじられているのではないということが、最後に必ず証される。そういうわけで、

「神に背くか、神に即くか」

と、それではっきり別れるわけです。その「神」というのはなにもただ概念的に「神」ということではありませんけれども。

3また再び言う『ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり』

4ここに二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐したもう神を拝し『アァメン、ハレルヤ』と言えり。5また御座より声出でて言う『すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大いなるも、我らの神を讃め奉れ』

非常にいい言葉ですね。

「すべて神の僕たるもの神を畏るる者よ、小なるも大いなるも、我らの神を讃め奉れ」

「僕」という言葉でもちろん男女両方を含めています。神を本当に拝する者、平伏す者、これが「神を畏れる者」です。

6われ大いなる群衆の声おおくの水の音のごとく、烈しき雷霆の声の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、7われら喜び楽しみて之に栄光を帰し奉らん。

非常な大きな、この世において聞くことのできないような素晴らしい大讃歌が上がるわけです。ここらを読むと、ヘンデル〔ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Händel, 1685～1759〕の「メサイア」〔Messiah　ヘンデルが作曲したオラトリオ〕なんかを思い出しますけれども、そのヘンデルの「メサイア」以上なわけです。

そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みずから準備したればなり。8彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』

ここに

「羔羊の婚姻」

という言葉が初めて出てくる。19章7節、

「ホ　ガモス　トゥー　アルニウー」

という字です。「羔の婚姻」というほど妙な言葉はないわけです。普通の人が「羔」と聞いたら、何のことだかわからない。これは言うまでもなく「キリスト」である。これは従順の象徴です。従順、信従と言ってもいい。要するに、神の聖なる意志を体現する。聖意体現の実存、聖意体現者です。

従順とか、信従というような言葉は、ややもするとただ心情的な面だけの響きを持ちますけれども、この「体現」となると、全存在でもって本当にそれに従っているということになるので、私としては「聖意体現」というような言葉を使いたくなるわけです。

●聖徒たちの正しき行為

そういった神の御意を完全に体現して行ったキリスト、それの「婚姻」というのですから、相手はもちろん今度は、キリストにまた信従している連中、広い意味で「信徒」――それを「教会」と言っているわけです――召されたる者、「召団」、召されたる団体です。

「召団」

というのは藤井先生が作った言葉ですが、私はそれを使わせていただいているわけです。もちろんいわゆる外側の教会員とか何とかというようなことではなくて、まさに見えざる教会。見えないけれども、具体的なもので、神さまの眼には見えている。いわゆる教会員が全部その

「キリストの新婦（はなよめ）」

というわけにはいかない。「キリストの新婦」は、いわゆる教会に属しない無教会の中にもあるし、無教会と言わない普通の人たちの中にもある。

「キリストの新婦は誰々である」

とは、人間の側から何人（なんぴと）もこれを限定することができない。それが即ち「新婦（はなよめ）」です。だから、「婚姻」となれば、キリストは「新郎（はなむこ）」で、こちらは「新婦」ということになる。

8 彼は輝ける潔き細布を著（き）ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』

と。註解によると、

『此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』というのは後から付け加えた註である。本文は実はそこはなかったはずだ」

というようなことを言う人がかなりあるようです。あるいはそうかも知れません。けれども、

「潔き細布を著ることを許された」

とある。自ら着ているのではない。「着ることを許された」とある。

「いくらそれが正しき行いであっても、正しき行いが即ち新婦となる資格であるというわけにはいかない」

ということを私はそこに読みたいわけです。人間の側の実存それ自身は、キリストの新婦であることができない。なんとなれば、パウロが言っているとおり、

「義人なし一人だになし」

という。新婦は実は本来、義人ではない。しかし、では正しい行いはどうしてできたか。これはキリストの恵みの力による。厳密な意味においての「正しさ」というものは――「正

しさ」には二通りあると思う――相対的な意味における一般の人の正しさというものは、それはある意味においては言えます。けれども、本当に厳密な意味においての「正しさ」（義）というものは、それはキリストの恵みにあずかるまでは、本当の義というところには来ないわけです。だから、聖徒たちの正しき実存というものも、

「それを着ることを許される」

というのは、

「恵みによっているからだ」

という、恵みの力によっての行為です。信仰と行為といっても、信仰は

「キリストの恩寵を、恵みを受けとる」

ことが信仰ですから。

「恵みにより、信仰によりて救われた」

というのがそのことです。

「恵みを受けとることによって救われた」

ということは、「恵みを受けとること」が即ち信仰なんです。信仰が「エトバス」「サムシング」（何ものか）であって、それで救われるなんていうことではありえない。ところが、キリストの言葉に、

「汝の信仰、汝を救えり」

という言葉があるでしょ。あの言葉に躓くんですよ。「汝の信仰」というと、

「私は実に信仰が固くなったから、キリストに褒められた」

なんて、そうではない。「汝の信仰」というのは、

「汝が私を、神さまを本当に受けて、自分なんていうものは問題にしなかったことが、神の救いの力がくることになったのだ」

というので、そこのところの読み違いを普通、してしまうので困る。

「どうも、信仰が薄いものだから、なかなか救われません。もう少し信仰が強くなったら救われましょう」

なんて、そういうことではないから、そこのところは間違わないようにしてください。だから、あのパウロの言葉の、

「恵みにより、信仰によりて救われたり」

というのが非常に大事なことです。恵信一如なんです。恵みが先です、恵みを受けとることが信なんだ。

「キリストの恵みを受けとる」

ことが信です。

「恵みとは何ぞや？」

は、もう少したってまたお話します。

そして、それから出てくるところの行為、善行、善き実存は、即ち「細布」をもって象徴されている。

「それを着ることを許された」

というのは、もともとその行為だって自分の行為ではない。恵みによって与えられたところの、自ずから生じてきた行為だから、それで、

「それは着てよろしい」

ということになる。

「お前のその行為は素晴らしいから」

というわけではない。イエス・キリストも自分の行為をひとつも誇らなかった。

「神さまがみなこれをなさったんだ」

と、それだけの話。ただそれぞれ人間は物体ではないですから、人格体ですから、それぞれを通していろいろなその特殊な色彩は出てくる。バラだとか、ユリだとか、いろんな色彩や形が出てくる。

それは様々だけれども、太陽の光という恵み、水という恵みはみな共通なんだ。太陽の光や水という恵みを、共通の恵みをいただきながら、現れるものはみな違う。それと同じこと。みな同じような類型的なものが現れるかというと、そうではない。皆さん一人びとり全部違う。ただし、それは特殊を通して根源的なものが現れたので、その根源的なものを与えた神を讃めたたえ、キリストを讃めたたえる。それだけの話です。

●忠実また真

9 **御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。**

これもそうです。「羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者」という。こちらから出かけて行くのではない。ご招待にあずかった者。ご招待にあずかった者は幸いである。

また我に言う『これ神の真の言なり』 10 **我その足下に平伏して拝せんとしたれば、彼われに言う『慎みて然すな、我は汝およびイエスの証を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんじ神を拝せよ、イエスの証は即ち預言の霊なり』**

「イエスの証」という言葉は前にあったので、これも後から付け加えた註ではないかというようなことを言うわけですが、まぁどうでもいいです。

11 **我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたもう者は「忠実また真」と称えられ、**

「忠実と真」というのは、

「アレティノス」（真理）と「デュカイオスユネー」（義）

即ち

「真理」と「義」
という字が使ってある。ヘブライ語でいうと、
「エメッ」（真理）と「セデック」（義）
です。「エメッ」というのは「アーメン」という字からくる。これは面白い。これは「アレフ」（始）と「タウ」（終）。それから「メム」（中）が真ん中にある。始め（エ）と中（メ）と終わり（ツ）。キリストは

「我は始めにして終わりなり」

と言ったでしょ。「始めにして中にして終わりなり」というのが「エメッ」（真理）という字なんだ。ヘブライ語の「タウ」という字は、別な書き方だと十字架なんです。「アレフ」は牛の頭。ヘブライ語のアルファベットにはみな意味がある。即ち、
「始めにして中にして終わりなるもの」
これが「真理」という。今のは「忠実」の方です。
それからあとの「真（まこと）」というのは、ヘブライ語でいうと「セデック」「義」という字です。だから、「エメッ」（真、信）と「セデック」（義）です。

「アブラハム、エホバを信ず」

という。エホバに対して
「アーメン」
と言ったら、エホバはこれを彼の
「義とした」
という。あの「アブラハム、エホバを信ず」がこの「エメッ」の方で、「これを義とした」というのがあとの「真（まこと）」にあたる。だから、まさにこの創世記12章のあの言葉がちょうどその中に入ってしまう。神さまに対して
「アーメンたる者」
それが
「義者」
である。まさにそうなんだ。神さまのなさること、言うことに対して
「然り」
と言う者は
「義」
とされる。これが「信ずる」ということ。神を「然（しか）り」とすることが「信ずる」こと。己を「否（いな）」として、神を「然り」とすることが「信ずる」こと。
己が捨てられるんですから、己は
「無者」
となる。己は何も無い。己が無者となって信ずるときにこちらが義とされる。義を与えら

れるわけです。その義の行為の徴であるところの、

「細き衣を着ることを許される」

という。キリストはまさにその神さまに対して「然り、然り」と動いた人だから、彼は義人であった。だから、

「之に乗りたもう者は「忠実また真（まこと）」と称えられ」

という。「忠実また義」と言ったらいい。これが白き馬に乗っている。言うまでもなくキリストです。

義をもて審きかつ戦いたもう。

「義をもて審く」という。義をもて、義か不義かをはっきりと定め給う。

●白く潔き細布

12**彼の目は焔（ほのお）のごとく、その頭には多くの冠冕（かんむり）あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。**13**彼は血に染みたる衣を纏（まと）えり、**

これは

「十字架の血」

です。旧約でいうとイザヤ書63章に出てくるところの、「ボズラからやって来る」ところの、あの酒槽を踏んだ、

「我、酒槽（さかぶね）を独りにて踏めり」

という、あの人が象徴しているところのものです。

「血に染みたる衣を纏（まと）えり」

というのが十字架の血であります。

その名は「神の言」と称（とな）う。

と。

「始めに言あり、言は神と共にあり」

という。その「神の言」。「その名は神の言と称う」というのは非常に面白い。これは正にヨハネ福音書第1章にあい通ずるところです。正に「ロゴス」という言葉が使ってある。

「ホ　ロゴス　トゥー　テウー」（神の言）

ですから、これはヨハネ伝にはっきりと通じます。それは

「テオス（神）のロゴス（言）である」

という。

14**天に在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乗りて彼にしたがう。**

「白く潔き細布」の「白き」は、

「キリストの血において白くせられたる者」

という、黙示録7章に通ずるわけです。黙示録7章14節、

「14**我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大いなる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。」**（黙示録7・14）とある。

15**彼の口より利き剣いづ、之をもて諸国の民をうち、鉄の杖をもて之を治め給わん。**

これは詩篇第2篇と通じ、また「利き剣」というのはヘブル書4章12節、

「12**神の言は生命あり、能力あり、両刃の剣よりも利くして、精神と霊魂、関節と骨髄を透して之を割ち、心の念と志望とを験すなり。13また造られたる物に一つとして神の前に顕れぬはなし、万の物は我らが係われる神の目のまえに裸にて露るるなり。」**（ヘブル4・12～13）

というわけで、神さまの前では詩篇139篇と同じようなことであります。

また自ら全能の神の烈しき怒りの酒槽を践みたもう。

これがさっきのイザヤ書63章と同じです。

「全能の神の烈しき怒りの酒槽を践みたもう」

という。この「酒槽」は血の如くに葡萄が迸りますから、それと同じようにキリストの十字架の血というものは、そのようなわけです。

16**その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。**

「ザ　キング　オブ　ザ　キングズ」

という、あのヘンデルの「メシアス」のはこういうところから持ってきたわけです。

「ザ　ロード　オブ　ザ　ローヅ」

という。

17**我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。**

まぁ大変なことです。現実の太陽ではないでしょうけれども。

大声に呼ばわりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言う『いざ神の大いなる宴席に集いきたりて、18王たちの肉、将校の肉、強き者の肉、馬と之に乗る者との肉、すべての自主および奴隷、小なるもの大いなる者の肉を食え』

要するに、これは現世的な勢力と、およびこれに従った者たち、即ちこの世の君なるサタンの勢力に従って、神に従わなかった連中、その最たる者は王たちです。政治家の力ある、権勢ある者たち。もちろん、当時のローマのことを考えているわけですけれども。現世的なものに執着した一切の者、神なき文明の子ら、その肉を食らえと。これはキリストもマタイ伝24章で、

「死骸には鷲が集まる」

という言葉があったでしょ。そういったことが砂漠ではよくありますから。「中空を飛ぶ凡ての鳥」がみんな食べてしまう。そういうようなことになってしまうぞと。

19 **我また獣と地の王たちと彼らの軍勢とが相集まりて、馬に乗りたもう者および其の軍勢に対いて戦闘を挑むを見たり。20 かくて獣は捕えられ、**
又その前に不思議を行いて獣の徽章を受けたる者と、その像を拝する者とを惑わしたる偽預言者も、之とともに捕えられ、
みんなやられてしまって、
二つながら生きたるまま硫黄の燃ゆる火の池に投げ入れられたり。21 その他の者は馬に乗りたもう者の口より出づる剣にて殺され、
「口より出づる剣」とは言葉、聖言のことです。
凡ての鳥その肉を食いて飽きたり。
そういう審判に、恐ろしい審判に遭って、神の僕らの勝利となる。そして、そこに羔の婚姻というものが迎えられて、神の名を讃美することになるという、それが大体のことであります。

●結婚路

ところで、この「羔の婚姻」という主題について少しく私たちは考えてみたいと思う。もちろん、さきほど言いましたとおり、キリストを信ずる信徒たちの群れ、それが極限においては全世界の人たちがキリストの新婦にならまほしという、万人救済の念願はあるわけです。しかし、現実にはそれはとても不可能なことでありましょう。「神の民」とした方が言葉としては広くなる。

ところで、この「新婦」というものが、藤井先生はご自分の奥さんの体験からして、『聖書の結婚観』という本を書かれた。私はこれは藤井先生に一番先にいただいた本なんだ。裏表紙に、

「１９２６年3月7日　雪降りし聖日の朝」

と書いてある。これを戴いた日は雪の降っていた日でした。

キリストに対する信仰は、信じぬき、愛しぬき、耐え抜くという。まさにコリント前書13章です。それが先生が強調された「貞潔」ということ。貞潔とか貞節とかいう。

「貞女二夫に見えず」

とかいう。しかし、パウロの結婚観でいいますと、どちらかが亡くなった時は再婚することがもちろん許されることが書いてあります。

「けれども、もう世の末は近いから、結婚は、できるならしない方がいい」

くらいなことが書いてある。コリント前書7章でしたかね。そうかと思うと、内村先生みたいに三回、三婚なさったかたもある。まぁ人それぞれです。再婚あるいは三婚の場合もあるし、いっぺん結婚したらもうあとは再婚はしないと、藤井先生みたいに貫く人もあるし。

……（友人に再婚を勧めた話省略）

人それぞれですから、再婚しないことも結構だし、また再婚することもあるし、それ自体がどうということではない。問題は要するに、どういう形をとろうが、本当に神に仕えるか、それをもって神の栄光を表すか。内村先生はまさにそれをもって神の栄光を現した。それは一人びとり違う。

だから、私は「結婚路」という。「結婚観」ではない。藤井先生は「観」といって、普遍的に言われた。それは望ましいです、もちろん、再婚しないで貫くのは。だいたい、女の人は貫くけれども、男はダメらしいね、ダメな場合が多いらしいが。要するに、各人がその路で歩くところの路であります。本来、もし望むべくば、それは再婚しないで貫くことはもちろん一番結構なことであり、その点では私はもちろん藤井先生の根本論に対しては一言もない。それはまさに然りと思います。けれども、それだけと言って決めるわけにはいかない、人間の路というものは。現実というものは割り切れないたくさんの要素がありますから。それで決めて、

「そうでなかったら、それは聖書の真理からはずれる」

とは言えない。人おのおの、その路に従って行けばいいが、しかし、とにかく、この「貫き通す」ということは美わしいことには相違ない。また最も望ましいことには相違ない、そういった意味で藤井先生の結婚観というものは。そうすると、ある人たちは、

「まぁ藤井先生の奥さんは素晴らしい奥さんだったから、あと結婚する気は起きないよ」

なんて悪いことを言う人がありますが、そういうことを言ってはいかん。先生も人間ですから、ずいぶん辛かったり、涙を流したりすることもあった。それはちゃんと書いてあるんだ、先生は詩の中に。『羔の婚姻』の下篇「饗宴」の第1歌「雅楽」というところにそのことが書いてある。

28　百合のごとくに私はあらうと。
　　しかし余りにも惨ましきまで
　　裏切られしかな、甘き予想は。

自分は百合のごとくに奥さんに対する気持を貫いていようと思っていたところが、なかなか現実はそうもいかなかったと。

31　ああ芳はしの白百合ならぬ
　　乱れまつはるおどろが身にて
　　私は彼女に会はねばならぬ
34　ああ泥濘に着きて離れぬ
　　豚のたましひ、ああ切り剖かれ
　　なほ死にきらぬ鰌のこころ。

37「赦せ！」涙して私は呼ぶ。
　げにわが半身ながら私は
　彼女の赦をこはねばならぬ。

（『羔の婚姻』下篇「饗宴」第1歌「雅楽」31～37行）

先生もアウグスチヌスのような気持も一面おありだったと思いますが。現実にどうこうということではないでしょうけれども。

とにかく、人間というものはいろんな要素がありますから。むしろ、偉大な人は矛盾を含んでいる。内村鑑三先生のそういった矛盾の存在を実によく思いやって書いているのが、天野貞祐先生です。天野先生がこういう文章を書いているかと思って、私は驚いた。それだからこそ、内村先生は本当の宗教家になられた。

たとえば、矛盾のない非常に澄みきったような人――カントとか、スピノーザとか――ああいう人たちはそういう悩みがないから、哲学者になれる。けれども、悩みの多い人はむしろ宗教家になる。それは自分の戦いをもって、そいつを貫いて突破していくという、そういう角度があるから。だいたい、宗教家というのはそういった悩みの多い人が多い。なかなか天野先生は見るところを見ているなと思った。

●十字架の贖いの愛

もう少しパウロの言葉を引用しましょう。エペソ書5章22節、これは結婚式には時々読まれるところです。

「22妻たる者よ、主に服うごとく己の夫に服え。23キリストは自ら体の救主にして教会の首なるごとく、夫は妻の首なればなり。24教会のキリストに服うごとく、妻も凡てのこと夫に服え。25夫たる者よ、キリストの教会を愛し、之がために己を捨て給いしごとく、汝らも妻を愛せよ。26キリストの己を捨て給いしは、水の洗いをもて言によりて教会を潔め、これを聖なる者として、27汚点なく皺なく、凡て斯くのごとき類なく、潔き瑕なき尊き教会を、おのれの前に建てん為なり。」（エペソ5・22～27）

パウロは理想を語っています、そこまではもちろんいきませんけれども。もうひとつ、ヨハネ書簡の方がはっきりするかな、ヨハネ第一書4章7節、

「7愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生まれ神を知るなり。8愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。9神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり。」（ヨハネ一4・7～10）

キリストは神の義を行った義人である。教会は、ところが、さっきの貞節ではなくて、不貞の妻なんだ。ふていやつなんだ（笑）。教会というのは不貞の妻なんだ。これは旧約のホセア書と同じだ。この奥さんはしょうがないやつで、イスラエルはヤーヴェーの神に対して――ヤーヴェーが夫でイスラエルが妻であるのに――その信仰の貞節を裏切って他の神々を拝んだ。それは宗教的姦淫である。ヤーヴェーはホセアに、

「お前の妻もその通りであるが、しかし、お前はあれを買い戻して来い」

と。そして、買い戻してきて、

「私にちゃんとついて来なさい。一緒にいなさい。私もお前にそのようにするから」

と言って、どん底に立ってホセアは妻を愛した。愛すべからざる者、捨ててもいい者を、なお捨てずに愛していく。

愛するに値しない者を愛していくのが、キリストのいわゆる「アガペー」（天的な愛）であります。人は「罪びと」でどうにもならん。それだから、もし裁かれたらお終いなんです。

「宥（なだめ）の供物（そなえもの）」

というのがそうだ。キリストが十字架にかかって、私たち不信なる者、不貞なる者を贖った。信仰者なんていったって一向、信仰者らしくない信仰者なんだ、お互いさまに。「信じた」と言ったって、それで天国に行けるかというと、どっこいそうはいかない。では何を信ずるかというと、要するに、キリストの十字架にしがみつくよりか仕方がない。

この十字架の贖いの愛です。「世を愛する」という、「世」とは「罪の世」なんだ。

「独子（ひとりご）を賜（たも）うほどに世を愛し給えり」

という、あのヨハネ伝3章16節も同じことだけれども。そういうように、独子を賜うほどに世を愛した。罪びとを愛した。

「愛する」とは、「かわいがる」ことではない。それを救い上げるんです、愛するとは。そのことを案外、みんなはっきり言わないんだ、

「救い上げる」

というような角度からは。私はいろんな本を読んでも、かなり宗教書を読んでいるけれども。もうあなた方の年配の時には、嫌というほど私は宗教書を読んで、もう宗教書を読むことが嫌になったことがあります。もう少し文学の本をよんだ方がよかったと思うくらい。

本当に「愛する」ということは、実は

「救い上げること、担うこと」

だ。これが非常にはっきりしてきたのは、私は聖霊をいただいてからです。キリストの愛というのはまさに贖罪の愛――

「贖罪愛」

と観念では皆言いますけれども、これは観念で「贖罪愛」と言ったってダメなので――本当に救い上げることです。

だから、

「羔の婚姻」

というのは、相手はそれ自体は不貞の妻なんだ。けれども、キリストの十字架を本当に信受して救われた、贖われた。それでこの「不貞」の「不」の字が取れて、「貞女」というのは今度は、恵みの事態なんです。そこから出てくる行為も全部、恵みから発するところの行為です。

それで、もし贖いの愛がただ十字架の愛だけだったらば――それは贖いの愛には相違ないんだけれども――それではまだ本当の、こちらの教会なる妻には力は来ない。感激はくる。

「ああ贖われた」

という感激はある。

「なるほど、私たちはもう罪から贖われて、本当これはありがたいな」

という感激はあるけれども。それはただ情感的な感激ではなくて、それが本当に積極的な自由の世界に、愛への自由の世界に、人を救いあげるような自由の世界に行くためには、どうしてもあとから聖霊が来なければダメなんです。

●贖われて御霊を賜った者

この一点で、まぁ藤井先生のものを読みましても、そこのところはやはり薄いです。この愛は強調されているんだけれども。私たちのこのダメなやつの中に――これは金色であると同時にまた天的な赤みを帯びている。愛だから。聖霊は黄金色である同時にちょうど夕焼けの空みたいに、黄金色と同時に赤みを帯びている――そういう聖霊の愛が来て、始めてこの教会は本当にキリストの、羔の婚姻に値するところの――この「値する」というのは与えられたる値、恵まれたる値です――値するところの新婦とされているわけです。

だから、ここには、

「もう俺はしょうがない野郎だ」

という、十字架の片一方の盗賊みたいなのが入っているわけです。これは、

「俺はしょうがない野郎だ」

と言ったら、

「いいよ、お前はパラダイスに行くんだ」

と。実はこの新婦というものには、何か非常に立派な行為をしなければ新婦になれないというのではなくて、しょうがないやつらがたくさん入っている。けれども、この「しょうがないやつら」は、ただ一点において本当にキリストが受けとられている。十字架を本当に受けとり、御霊をいただいている、そういった連中ははっきりと「新婦」としていれられる。だから、羔の婚姻の相手は、贖われたる罪びとであって、しかも、その贖われて御霊を賜りたるところの者ははっきりその中に入っていく。

それとこの中心になる人たちは、これはダンテも語っているように、「天国篇」18曲の130行あたりに、

「然しただ抹殺せんために記す汝
汝が荒らす葡萄園のために死せる
彼得（ピエトウロ）と保羅（パオロ）とが尚ほ活けるを思へ。」
（『神曲』「天国篇」第18曲130～132行）

即ち葡萄園のために死んだところの殉教者たち。教会は「葡萄園」といわれている。イザヤ書5章に出ている。

「せっかくの葡萄園がダメになってしまった」

と書いてある。殉教者たち、即ちこの福音の真理のために身を捨てた人たち。そういった人たちももちろん神の民です。そういった者たちは羔の婚姻の一番中心的な人たちでありましょう。

とにかく、羔の婚姻の相手はいろんな人がある。

「こういう人たちだけ」

なんて、決まっていない。しかし、中心になる者は何といったって、真理のために、福音のために、御名のために死んでいった人たち。そのために本当に挺身して殉教の死を遂げた人たちが何といったって中心です。それから、

「もう俺はしょうがない」

というようなやつもみんな入ってくる。しかし、それはみんな本当に十字架を受けとったからです。ただいわゆる「貞潔でなければならない」というようなことではない。

そういうようにして贖われて本当に御霊をいただいて、このキリストの生命が一番中心となって動きだしたような連中、そして、戦って行く人たち。それは窮極においては、そういう人たちは殉教者にまたなっていきましょうけれども。

要するに、キリストの新婦というのは、この十字架を受けとり――十字架を受けとっただけでもいいよ――けれども、更には御霊を受けとって、そして窮極的な実存としては、殉教のような在り方をもってした人たちを中心として、人間の側からは限定することのできないいろいろな人たちが、この羔の婚姻にあずかるところの人たちであるということを思わざるをえない。ややもすると、ただこの

「潔き細布を着ることを許されたる」

人たちだけであると思うけれども。もちろん、さっき言ったとおり、「許される」というのは贖いから来ている。全然ひとつもその善き行為が出てこなくても、受けとっただけで救われるんですから。本当に受けとっただけでもって。それは親鸞の『歎異抄』もその通り、「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」でもって、仏教の天界の世界に、如来の世界に行くんだから。

「それだからいい」というのではないけれども。みなそれぞれの在り方でもって、とにかく「まこと」であることです。

そういった意味において、この「新婦」はさまざまな内容があるわけです。まぁいずれそんなことを書く時がくるかも知れませんが。

「羔の婚姻」について、贖いかつまた本当に御霊が来ないと、キリストへの愛への貫きというものは、御霊の力が来なければ本ものでない。でありますので、「信ずる」ということと「愛する」ということが全く一つになる。一番本当の世界は必ずそういったものが一つの渾然（こんぜん）たるものになってくる。

これが本当に御名を讃え、全存在をもって

「ハレルヤ！」

と叫んで進んで行こうと。どうぞ、いろんなことに遭いますけれども、決してそうことにこだわらずに、へこたれずに行きましょう。大丈夫ですから。そして、一切を神にゆだねていく時に大平安がくる。人間の側の細工はひとつも要らん。誰にどう思われても大丈夫です。

それではお終い。讃美歌228番「ガリラヤのかぜ」を歌いましょう。